

ティーチング・ポートフォリオ  
「日越同時教育システムの確立を目指して」

大学名 人間総合科学大学

所 属 人間科学部

心身健康科学科

名 前 熊谷勝義

作成日 2023年9月28日

## 1. 責務 (何を行っているか、何を果たしているか)

本学では人間のこころ・からだ・環境社会の面から追求し、学際的に統合して科学的に探究する。このアプローチにより、学生は真の人間性を理解し、自立と共生の精神を育み、活力に満ちた創造性と豊かな人間性を培うことができる。さらに、心身健康科学の目標である「よりよく生きるための知恵の創出」に基づき、学生が心身健康科学の知識と科学的な思考、実践的な能力を組み合わせ、よりよく生きるための知恵の創出が成せるよう教育の推進に努め、現在、以下の科目を担当中である。

- ・学部4年生の選択科目：「総合演習（探究）」。
- ・大学院科目：「心身健康科学特講（D1・M1）」、「心身健康科学特殊演習 1/2/3（D1・2・3）」、「心身健康科学特論 1/2/3（M1）」、「心身健康科学研究 1/2（M1）」を担当する。
- ・大学院健康情報マネジメントプログラム科目：「サイエンスコミュニケーション学（M1）」、「健康情報計測学（M1）」、「健康情報処理学（M2）」、「ストレス評価学（M1）」、「健康支援演習（M2）」、「ストレスマネジメント演習（M2）」、「合同ディスカッション（D1・M1）」を担当する。また、日本心身健康科学会の院・学会連携担当に従事しているが、ベトナムへの出向に伴い、業務へ協力することが困難になりつつある。
- ・委員会活動は「図書館運営委員会」委員を担当したが、ベトナムへの出向に伴い、その業務より外れる。
- ・その他、本学研究所主催の「第69回心身健康科学サイエンスカフェ」の講師、「2023年度THUV入学式の講師」を務める。さらに、THUVの1,2年生を対象にした心身健康科学における補助的な教育指導を担当する。

## 2. 理念 (教育に対する考え方)

本学における教育上の目的は、我が国の発展や国際社会に貢献しうる創造性豊かな活力ある人材育成を目的としている。この目的を遂行するため、以下のような点を重要視した教育を心がけている。

- ・**学際的な教育**：心身健康科学では、異なる視点や手法を持つ複数の分野を横断的に学べるため、柔軟な思考や問題解決能力を養える。このことから、教育理念として視野を広くした教育を心がけている。
- ・**思考の深化と鋭敏化の育成**：大学・大学院での教育では単なる知識の蓄積ではなく、情報や知識を客観的に評価し、独自の意見や考えを形成する能力を養うことが重要である。このことから、特に大学4年生の探求や大学院生の研究指導については、思考の深化と鋭敏化の育成を心がけている。
- ・**自主性と独立性の養成**：大学生や大学院生は成熟した大人として、自らの学びの主体となるべきだと考えている。そのため、学生の自主性や独立性を尊重し、自ら学びを深める機会を提供することを心がけている。
- ・**実践的な学び**：理論だけでなく、実際の現場や業界での経験を通して、知識を実際のスキルや能力へと変える機会を持つことが重要である。そのため、将来的には、分子生物学的実験、細胞工学的実験、発酵工学的実験などを駆使した実践的な学びについてもサポートすることを考えている。また、社会的にニーズが高まりつつある遺伝子検査技士や胚培養士の養成も考えていきたい。
- ・**持続可能な学び**：本学の学生は終身にわたって学び続ける方が多く、それを支える基盤としての学び方や考え方を養成することを常に念頭に入れている。

・**多様性の尊重**：本学の学生は、多様なバックグラウンドや価値観を持っている。学生達が共に学ぶ中で相互の違いを理解し、尊重し合う姿勢を養えるようサポートすることを心がけている。

・**倫理と社会的責任**：既に専門家としての知識や技術を持つ本学の学生については、本学で学んだ知識や技術を利用して社会に貢献することが期待される。そのため、本学の学生がより実践的な探求や大学院生の研究指導を通して、倫理的な観点や社会的責任を持つことの重要性を学べるように心がけている。

・**生き抜く力の養成**：本学の学生が社会を生き抜く力を自ら養成するために、その核心となる心身健康科学について理解を深めるサポートが必要である。心身健康科学による私のこれまでの社会貢献や日々の研究成果を公にし、これらを基に学生が生き抜く力を養えられるように心がけている。

・**ライセンス取得のサポート**：本学の学生が日本心身健康科学所属会のライセンス（アドバイザー）取得推奨に貢献することを心がけている。

### 3. 方法（教育方法において大切にしていること）

本学では自立と共生の精神をもって、心身の健康に関する多様な職業や社会の発展に貢献できる人材を育成する目的としている。このため、心身相関に関する科学的な知見を深めることが重要であり、そして理解することが学生に求められる。すなわち、自立と共生の精神を持ち、心身相関に関する科学的知見を深める学生を養成するためには、これまで私が基礎研究で培った知識（分子生物学を中心にした専門分野の知識や自律的且つ共生的な研究構想、論文検索、論文作成、論文投稿など）や技術（細胞培養実験や遺伝子操作実験、胚操作実験）を活用することで、学生への理解を深められると考えている。例えば、ストレスによる身体（内在性遺伝子発現・細胞形態・胚の形態）への影響などを実験によって可視化することは、心身健康科学について学生の知見を深める重要な教育の一つである。これらを踏まえ、教育方法では以下について大切にしている。

・学部生の「総合演習」では、一人一人の研究プラン概要書・ヒアリングシートをよく精査し、学生と面談とディスカッションを重ねることで研究テーマを決めている。さらに、学生一人一人に対して研究計画や卒論の道しるべを独自に作成し、研究テーマに沿った調査研究を学生のサポートという形で実施しつつ、人間総合科学の探求・報告書の作成を学生と一緒に進めている。つまり、**学修方法では、学部生一人一人に寄り添いながら学生と一緒に課題について考えつつも、学生の自立的な学修を実現することを大切にしている。**

・大学院の講義では、心身健康科学特講（D1・M1）等の科目にて UHAS@マイ campus のフォーラムを通じてディスカッションに参加し、学生の知見を深めることをサポートしている。また、「合同ディスカッション（D1・M1）」、研究報告会などでは、フォーラム以外にもモニター利用や直接非対面によるディスカッションを重ねることで、課題について学生が知見を深めていくことをサポートしている。さらに、心身相関に関する論文を私より提示し、多方面からの切り口がることを指導し、学生の知見を深めることをサポートしている。つまり、大学院生の**学修方法においても、学生一人一人に寄り添いながら課題について知見を深め、学生の自立的な学修を実現することを大切にしている。**

・今後、世界中の多くの方が心身健康科学の重要性について理解を深めるために、「こころ」と「からだ」の相関を可視化する試みを基礎研究レベルで教育手法として確立できないか検討している。具体的には、ストレスによる胚発生への影響について内在性遺伝子発現レベル、初期胚の形態レベル（異常

発生胚の有無)で可視化し、教育へ活用することを検討している。なお、経費については2024年度科研費として日本学術振興会へ申請中である。

#### 4. 成果 (学生さんからの評価に対して、学生さんの学修成果について)

探求Ⅰ・Ⅱでは、学生より以下のような評価を得られた。

・研究について学生の話をよく聞き、適切なアドバイスからテーマが明確になり、熱意をもって取り組めそうな論文テーマを決めることができた。

・先生と実際に話すことで前向きに考えることができ、やってみようという気持ちを持つことができた。

・先生との面談を通して、今回の卒業論文についてより具体的に考えることができた。なかなか、自分一人で考えていると怖気ついて前に進めないものが、実際に先生のお話の中から、沢山のヒントや、研究の道標をいただき、こんな自分でも頑張れるかな・・・と不安や迷いから、前向きに取り組める気持ちに変化してきた。

・上記の評価に基づき、学部4年生の探求Ⅰ・Ⅱの授業では、研究の骨格がしっかりと形成されており、学生たちの研究がスムーズに進行している様子が見受けられる。提出物に関する遅延も発生しておらず、面談もZOOMや対面で有意義に行われている。しかし、学生からの私生活に関する相談が増えており、それに対する面談時間の取り扱いについては今後の改善点として捉える必要があると感じている。

・担任として学部生の指導においては、ルーブリックの説明や学習相談を各学生に対して行った。連絡が取れない学生に対しても頻繁にアプローチをかけた結果、多くの学生とコンタクトを取ることができた。とはいえ、まだ連絡がつかない学生もいるため、それに対する取り組みは今後の課題と認識している。一方で、学修相談の際には、仕事と勉学の両立に関する相談が特に多かった。私は、学生たちの悩みや考えを丁寧に聞き、私の経験も踏まえてアドバイスを行った。その結果、多くの学生が主体的に学習に取り組む姿勢を見せてくれた。ただし、学生の中には仕事と勉学のバランスを保つことが難しく、退学を選んだ者もいる。このようなケースにおける私のアドバイスが適切であったのかどうか、今後の指導に生かすための課題として捉えている。

・大学院生の指導に関して、4月から6月という短期間ではあったが、授業や研究発表、UHAS@マイcampusのフォーラム、直接対面でのディスカッションを実施することで、有意義なフィードバックや指導を行うことができた。

5. 目標（教育活動の中短期目標と達成時期）

中期の目標は、以下のスケジュールに従って、本学の数学マネジメントを基にした学科および専攻の運営に貢献すること（図1）。さらに、ベトナムと日本間で安定した教育の実現を目指す。特にベトナムでは、ベトナム教育訓練省教育開発局（VIED-MOET）の教育指導要領に基づいて対面式の教育を進めることを目標とする。



図1.教育活動の中期目標と達成時期

短期目標は、以下のスケジュールに沿って学生の各課題を遂行し、来年度にベトナムで実施予定の心身健康科学の対面授業および日本での研究指導法を確立する（図2）。

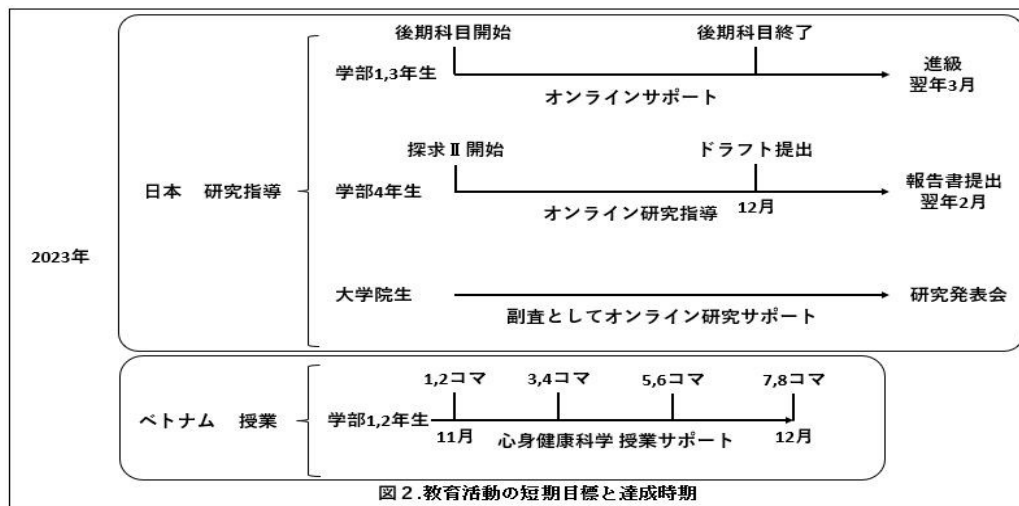


図2.教育活動の短期目標と達成時期

\* 表紙を含め、全体として、3～10ページ程度とします。

\* TPの記載内容を客観的に示すためのエビデンスとなる資料項目を箇条書きで列挙ください。  
(シラバス、開発教材、学生アンケート等、特に特徴的なものを列挙し、必要に応じて、  
すぐに確認できるようにしておきます。)

- ・2023年度シラバス
- ・人間総合科学の探求I\_面談実施報告書
- ・人間総合科学の探求I\_研究プラン技洋書・ヒアリングシート
- ・探求I\_面談実施報告書
- ・探求I\_研究プラン技洋書・ヒアリングシート
- ・2024年度科学研究助成基金助成金への科研費申請書